

SUBMACHINE GUN CALIBER .45 M3/M3A1

第二次世界大戦は多くの兵器が生まれたが、中でもサブマシンガンの発展が目覚ましい。兵士一人ひとりの戦闘力を最大限に高め、戦いの在り方を変え、能率と効率を高めた。その時代、米軍がひとつの傑作を完成させる。コントロールし難い.45ACP弾を使いながら、他国軍とは異なる開発コンセプトによって最高の攻撃力を持たせることに成功したのだ。その名はM3サブマシンガン。トンプソンSMGの後を継ぐ形で米軍に制式採用され、いくつもの大戦で活躍し、愛され、現在までも現役であり続ける稀代の一挺である。

Report by KEN NOZAWA

図版解説 / 鈴木健太郎
Photo / U.S.ARMY, U.S.NAVY, USAF, WPP Archive

M3/M3A1



機能性を徹底追究し開発された近代兵器
サブマシンガンとは血の通わない武器だ
だがそれは、何者にも換え難い無二の相棒でもある

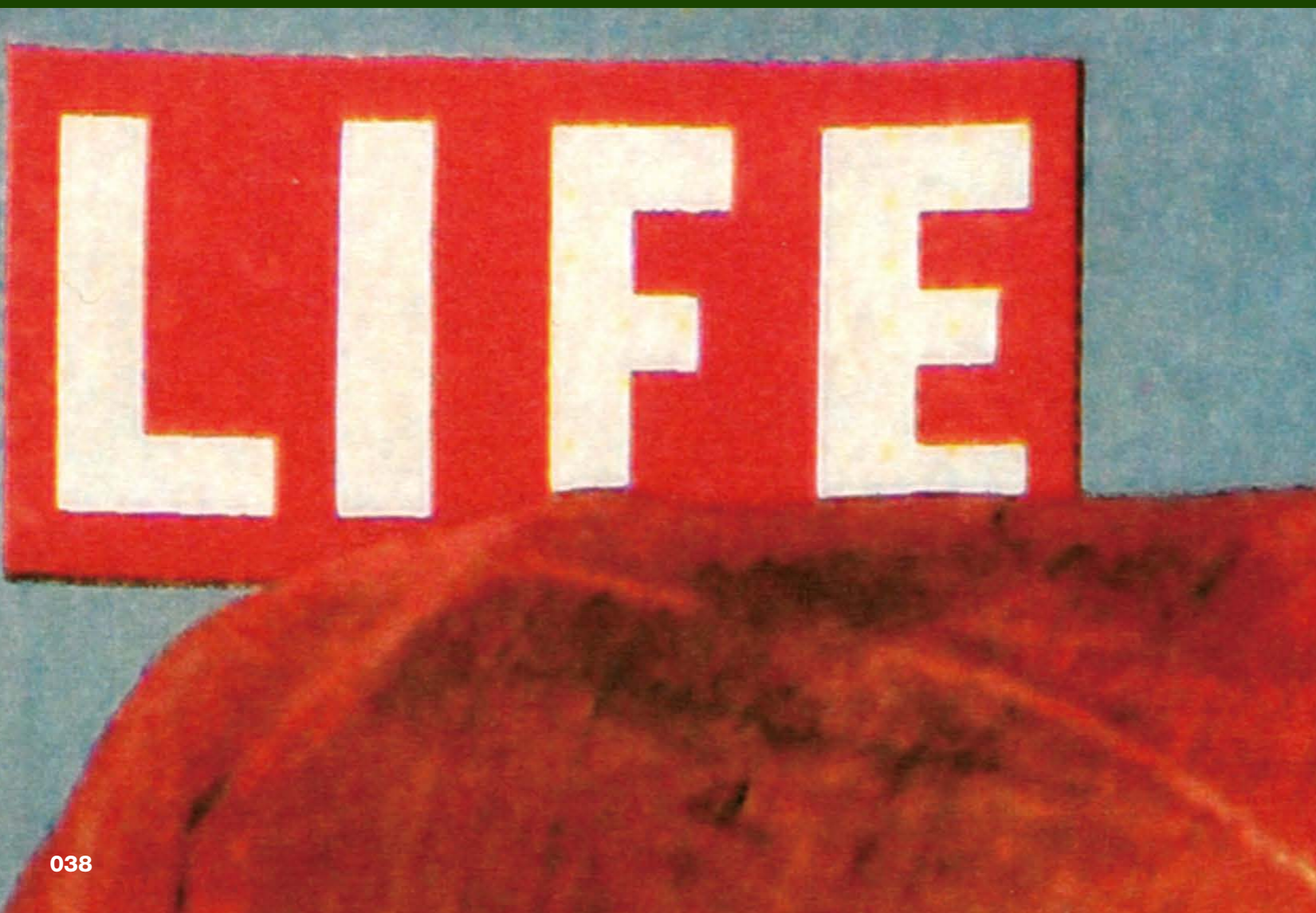
LIFEが語る ベトナム戦争

20世紀アメリカ社会と兵士の顔

文／原克(早稲田大学教授) 構成／編集部

本シリーズは、20世紀を代表する雑誌『ライフ』が報じたベトナム戦争を扱う。そこには戦争のリアルを物語りつつも、米国社会が抱えこんでいた願望や苦難が無意識のうちに投影されている。『ライフ』の語り口を通して、米国がベトナムという「他者」といかにして向きあっていたかをあぶり出す。第二回目は、ベトコンがどのような「敵」として語られているか。『ライフ』が物語る「敵の顔」を取り上げる。つねに他者として語られる「敵の顔」には、じつは、自分の深層に潜む「負の側面」が逆投影されているのではないのか？ 敵とは「否定さるべき自分」ではないのか？

第2回「野蛮な敵 敵の顔イデオロギー」



遠い戦場

『ライフ』1961年10月27日号は、敵を描こうとしている。

フランス植民地軍がディエン・ビエン・フーで北ベトナム軍に大敗し、インドシナ半島から遁走した後、1960年代前半、アメリカはベトナムに介入する必要性を、これまで以上に痛感しはじめる。

朝鮮戦争後、中国共産主義政権は、南方の東南アジア地域に侵攻してくるに違いない。自由主義圏を守るため、世界戦略の観点からしても、共産主義勢力の南下はなんとしてでも阻止しなくてはならない。防波堤はベトナムである。ホワイトハウスはこう考えたのだ。

今や、アメリカの世界戦略にとり最重要地点と目されたのが、ベトナムであった。

ベトナム？ しかし、それはあまりに遠く、あまりに疎遠な国だった。

一般のアメリカ人にとって、インドシナ半島の政治的重要性を理解しようにも、そもそも一体どこにある、どのような国なのか？ 知る者はほとんどいなかった。

なるほど、『ライフ』も事の重要性を見抜き、早速、特集記事を組んでいる。同誌1961年10月27日号の特集「ベトナム：われわれの次の天王山」が、それである。(右中図)

巻頭の「編集部より」が、企画の本意を宣言している。

「事態の重要性と報道写真の迫真性に鑑み、本号は、主要部門(17ページ)をベトナムに当てることに決した。編集部」。

しかし、冒頭記事のタイトル群が、当時のアメリカにとり、ベトナムがいかなる文化的価値・社会的評価を得てい

たのかを、如実に表している。

曰く、「愛すべき国…爆発する危険性」。曰く、「これがベトナムだ」。あるいは、「仏教に抱かれ、フランスに植民地化され、自由世界に望まれる」。

要するに、ベトナムはアメリカ人にとって、まるで馴染みのない、地球の裏側にある小さな半島国に過ぎなかった。まずは、ベトナムという存在を、読者に知ってもらうことから始めなくてはならない。

すべてが、そうした趣意にそって誌面構成されているのだ。

あたかも、旅行会社のパンフレットか地理の教科書でもあるかのようになり、『ライフ』は筆を進めている。

「伝統的な踊りの集合写真」を掲げ、「農村地帯ののどかな風景」を紹介し、ゆったりとした流れに「ボートを漕ぐ女性」や「水中で釣りをする少年たち」、「水車を踏む少年」を配して、「豊かな穀倉地帯」であることを、まずは紹介してゆくのだ。

風光明媚な土地、自然と共生する穏やかな人びと。そんなエキゾチックな桃源郷に、突如、国際政治の苛烈な刃が向けられてくる——共産主義勢力の南下。

こんな「地上の楽園」に、侵入してくるのは、一体どんな輩なのか？ いかなる悪意をもった勢力なのか？

善玉と悪玉

こうした事態を、記事は次のように記している。(右下図)

「東洋の中でも、南ベトナムほど、観光ポスター以上に、素晴らしい人びとに溢れ、仏教の伝統が豊富で、楽しげな国はない。にもかかわらず、今日、恐ろしい顔つきのゲリラ兵士(grimvisaged guerrilla soldier)と、かわいらしい女性たち(pretty girls)とが、あたりまえ



上／『LIFE』1961年10月27日号表紙「ベトナム：われわれの次の天王山」。特集「共産主義第二弾」。『LIFE』1961, October 27, FP 中／「これがベトナムだ」。『伝統的な連の舞踊。フエ王宮門を背景にした儀式的踊り子たち。アンナン(安南)の老王の御前で披露する舞踏は連のつぼみが開いてゆく姿を表す。現代ベトナムの慣習も多くは仏教に由来している。仏教は数世紀前に国王により受け入れられて以来国民宗教になっている』。ibid.p.38 下／「東洋の中でも、南ベトナムほど、観光ポスター以上に、素晴らしい人びとに溢れ、仏教の伝統が豊富で、楽しげな国はない。にもかかわらず、今日、恐ろしい顔つきのゲリラ兵士と、かわいらしい女性たちが、あたりまえに共存する国でもある』。ibid.p.36



プロジェクトデルタ 偵察マニュアル Part 7

スナッチ(敵の捕虜獲得) に関する諸注意 前編

文/鈴木健太郎
写真/U.S. ARMY, U.S. NAVY, USMC, USAF,
AUSTRALIAN WAR MEMORIAL, WPPアーカイブ

アメリカ軍軍事顧問が見守る中、捕虜の取り扱いを学ぶ南ベトナムレンジャー部隊の訓練生。ベトナム戦争で行なわれた長距離偵察チームによるスナッチは困難をきわめ、特殊部隊員が率いる偵察チームをもってしても成功率は1割ほどしかなかったという。



(左)二人がかりで仮想敵の拘束と身体検査を行なう陸軍の兵士たち。こちらと相手の双方がダメージを受けずにこの作業を行なうのは意外と難しい。2014年7月 クウェート。(右) ベースキャンプにおける捕虜の尋問。尋問で引き出される情報は捕虜の所属や階級によって大きく異なるため、スナッチが行なわれる際にはターゲットに関して将校であることなどの条件がしばしば加えられる。(右) 拘束に手こずり揉み合いになってしまったジブチ軍の兵士たちと仮想敵役のアメリカ軍兵士。敵地でのスナッチでもしこのようなヘマをすれば、チームは捕虜を連れ帰るどころか自らが生還するのも難しくなる。2009年3月 ジブチ

1 全般

偵察チームがスナッチを実施する際には通常の偵察で行なう手順に加えて以下の注意がある。
a RZ (偵察地域) の地図を精査し、スナッチに適した場所を予め選定しておく。
b LZ (着地地点)、E&Eルート (脱出および逃走経路)、基準地点、小道、スナッチを行なう場所、そしてRZの地勢や植生を把握するため実際のスナッチの前に現地の下見を行って行く。
c 下見で写真撮影が出来たのであればその写真、なければ手に入り得るすべての写真を注意深く見ながら、優先LZと代替LZ、スナッチを行なう場所への侵入路についての最終決定を行なう。
d チームの各メンバーに役割を振り分けるとともに訓練と実地に必要な装備を選別する。
e AN/PRT-4とAN/PRR-9またはHT-1無線機をいつでも使用可能な場所に装備しておく。
f チームリーダーはチームの人数と携行する装備を選定する際に、航空機がチームの侵入と撤収が無理なく行なえる高度を保つことができるか、行きと帰りで飛行時間がどのくらいかかるかを予め考慮しておかなければならない。

2 訓練

訓練では実地に極力近い条件でリハーサルを行なうこと。捕虜に手錠や猿ぐつわ、目隠しを用いるのであればその訓練も積んでおく。捕虜を運ぶ予定であれば、単に20~30メートル引きずるのではなく実際にスナッチを行なう場所から撤収に用いるLZまでの距離にならなければならないこと。

- a スナッチを成功させるために必要な役割は以下の通り
- 1 手錠、目隠し、猿ぐつわを用いて捕虜を拘束し、所持品検査を行なう。
 - 2 負傷した捕虜の手当てを行なう。
 - 3 捕虜を運ぶ、あるいは捕虜が自分の足で進む手助けをする。
 - 4 捕虜が持っていた装備と武器を運ぶ。
 - 5 チームが用いた待ち伏せ地点の痕跡を消す。
 - 6 負傷した、あるいは行方不明になった味方への対処と彼らが持っていた武器および装備の管理。
 - 7 前方および後方の警戒。この役割は 状況に応じて誰が代わりに行なうのかについても前もって決めておく。
 - 8 撤収に用いるLZの安全確保。
 - 9 LZにおける捕虜の見張り。
 - 10 航空機に最初に乗り込む者。
 - 11 捕虜を航空機へ引き上げる者。
 - 12 航空機に乗った捕虜の安全確保。
 - 13 搭乗中の捕虜の付き添い。
 - 14 捕虜が持っていた装備の持ち出し。
- b そのほかの訓練、ミーティング、リハーサルが必要な事例について
- 1 スナッチを行なう場所が発見された場合における各メンバーの対処。
 - 2 配置に付く際の各メンバーの動き方。
 - 3 各種の合図。
 - 4 メンバーと装備の隠蔽。
 - 5 クレイモア地雷の設置。
 - 6 準備が予定した時間に間に合わなかった場合どうするか。
 - 7 悪天候で航空機が来られない場合どのように脱出するか。



(右) 仮想敵に捕らえられてしまったパイロット。戦地では目隠しとして写真で見られるような土囊などの袋、タオルや手ぬぐい、さらにはTシャツとありとあらゆる物が用いられる。2013年10月 アメリカ本土 (下) 解放戦線旗を持った仮想敵役のアメリカ軍兵士たち。ベトナム戦争時には実戦を想定した訓練に十分なリアリティーを持たせるため、仮想敵役は主にアジア系の兵士が選ばれていた。



2022 IPSC Pan American Handgun 完結編 Championship

2022年9月に行なわれたIPSC南米選手権に挑んだ鮫島宗貴。いきなりのガントラブルに見舞われるも、冷静さを失うことなくバックアップの銃に切り替え、次のステージへ向かった。自分との闘いの厳しさと難しさ、そして、その先にあるものとは——。2023年7月号に続く短期連載最終回!

4日間の試合も残すところ後1日のみとなった。この時点で、試合をリードしていたのはアメリカのクリスチャン・サイラー。まだ20代前半の彼は、この数年USPSA全米選手権、各エリア・チャンピオンシップにて勝ち星を積み重ねており、現在最強のシューターの一角に君臨している。僕はUSPSAのメジャー・マッチで常に90%という数字を目標としてきた。過去の全米選手権では85%前後の数字を残してはきたが、この数年、トップ・シューター達のレベルが飛躍的に上がったことから、彼らを追いかけるのがやっと……という辛い現実があった。それでも、諦めることなく、しぶとくトレーニングを積んできた僕は、2020年のUSP

SAエリア8チャンピオンシップにて、優勝したクリスチャンに対して87%という数字を残している。90%が遠くない所までできたのだが、それ以降の試合では銃の故障に悩まされ、数字を残せないうでいた。90%の壁をどうしても超えられない状況が続いているのだ。そして、今回のIPSC PAHCでも、先に述べたように(※2023年5月号参照)初日に最初のステージを撃った直後に、銃が故障するという事態に見舞われた……。どうしてこうも運がないのか……。ダメだと分かっている、ネガティブな思考になってしまう自分がいた。銃は練習用と本番用の2挺体制だが、それでも対応に限界があるのがIPSC/USPSAのレースガンの世界。

一筋縄ではいかないのだ。ともあれ、僕は今回のIPSC PAHCで90%は厳しくても、どうにかして何とか85%は確保したいという強い想いがあった。3日間の日程が終わった時点で暫定83%のパフォーマンスを何とか2%上げ、せめて85%に……。だが、これは、簡単なことではない。ここまでの自分のペースを維持することですら難しいのがIPSC/USPSAだ。しかし、それでも僕はリスクを覚悟で攻めの姿勢で挑むことにした。過去の経験から分かっているのは、守りの姿勢で挑んだとしてもミスを犯すリスクはゼロにならないということ。それであれば、攻めて失敗してもともとという考えで挑んだ方がよい。もちろん大失敗は許されない。た

だ、失敗を恐れずに、攻められるポイントではプッシュしようと、強く心に誓った。

試合最終日の挑戦

6ステージの内、得られるポイントの高い発射弾数の多いステージで何とか追いつきたい。つまり、発射弾数が10発のステージなら満点は50点であり、その80%は40点だが、30発のステージなら満点は150点。80%なら120点だ。同じ80%を出すなら、発射弾数が多い時の方がポイントを稼ぎやすい。最終日の最初は10発のショート・コース。しかし、25ヤード前後先に設置されたスウィンガー・ターゲットをスプリングの上に設置されたユラユラと振動するプラ

ットフォームから撃つトリッキーなステージだ。ここでは、マイク(ミス)を出さず、スムーズに撃つことがカギとなる。スタート姿勢も椅子に座った状態からアンロード状態の銃をテーブルからピックアップして、ロードしてから撃ち始めるという内容だ。

ブザーが鳴り、銃をピックアップし、マガジンをグリップに叩き込むとしたが、少し手間取った。焦りを感じたせいか、ポッパーに対しての初弾を外す……。すぐに撃ち直すが、2枚目のポッパーも外してしまった。強敵のスウィンガーこそ、2発をAゾーンに収めることが出来たが、メイク・アップ(撃ち直し)が入ったことで、タイムは伸び悩んだ。気

持ちを切り替えて2ステージ目に移る。発射弾数が多いロング・コースだ。シュート・ハウス内部で撃つターゲットはかなりの近距離であり、ココはプッシュして攻めたいステージだ。ブザーが鳴り、最初のポジションへ走る。やや遠いターゲットが最初だったことで、止まらずに撃つことを躊躇してしまった。シュート・ハウスに突入してからは、攻めの姿勢でダブル・タップを各ターゲットに放り込む。最後のターゲットにダブル・タップを決めた瞬間、銃を手前に引き寄せて、アンロードの態勢に入ったが、ココで弾痕が1つしかないことが目に入った。“……まさかマイク!?” いやな考えが頭をよぎる。だが、ターゲットは手を伸

最終日最初のステージは、この椅子に座った状態からアンロード状態の銃をピックアップし、マガジンを装填して撃ち始めるショート・ステージだった。写真だと分かりづらいが、シューティング・エリア全体がスプリング上に設置されたプラットフォームになっており、立ち上がると足元がユラユラと振動する厄介なステージだ。

ばせは触れることができる程の近距離に設置されている。この場合、まったくの同一弾痕(パーフェクト・ダブル)もあり得る。ターゲットのチェックに来たROは、慎重に弾痕をチェックするが、無情にも僕に対してマイク(※ミス)を宣言した。このような状況下では、シューターはその判定に対して異議を唱えることができる。その場合、ターゲットは

スタンドから取り外され、ステージに常駐するRO達ではなく、そのエリア全体を統括するエリアCROという担当者が呼び出され、より厳密に判定作業を行なってもらえるのだ。これはUSPSAでも同じだ。ターゲットが近距離ということも考慮して、僕はターゲットを取り外しての判定を行なってもらうよう要請した。ステージROが、エリアCROを無線で

呼びだす。まずはターゲットが外され、ステージ横の簡易テントの下にて判定作業が行なわれる。この時のCROはスマートフォンで虫眼鏡のようなアプリを使用して、弾痕が1発以上の大きさを判定していた。「うーん……。確かにターゲットは近距離だし、パーフェクト・ダブルという主張は理解できる。だが、残念だけどこれは1発のみでマイクだ」



内部メカニズムは最新のバージョン3。ボアアップ・チャンバーが生み出す強烈なエネルギーを受け止めるスチール・インサート入りのスライド・ストップノッチも採用されている。



様々なアイデアを駆使して、スムーズなスライド・アクションとハイスピード・ブローバックを確保したスライド・グループ。リコイルスプリング・プラグは、スライドのレリーフカット部分全体でスプリング・テンションを受け、スライド・トップへの負担を軽減する独特のデザイン。モデルガンの時代から受け継がれる賢いスタイルだ。



●Photos & Text by SHOTGUN MARCY
☎ウエスタン アームズ 03-3407-5922
<http://www.wa-gunnet.co.jp>

BERETTA M1934 CBHW Ver.

ノスタルジックなムード溢れるイタリアの軍用セミオート
ベーシックなCBHWバージョンで再登場!



久々に再生産された伝説のM1911コンパクト・カスタム“ホークK.K.スペシャル”。グリップ・パネルをブラッド・ウッドの縞目チェッカーに変更した以外は、かつてのクオリティをすべて引き継いでいる。付属のマガジンには厚さ5mmのプラス・バンパー付き。すべてのコンパクト・シューターが憧れた理想のM1911コンパクト・カスタムの魅力を余すところなく再現したハイ・クオリティなマグナ・モデルだ。





Militaria Roundup!

復刻M1956装備とベトナム戦争関連装備 Part 1

ベトナム戦争の終結から48年が経過し、かつては安価で購入できた当時のアメリカ軍装備も品薄となった。第2次大戦中の軍装備は復刻版が複数のメーカーから販売されているが、ベトナム戦争アイテムはまだ種類が少ないのが現状。今回は現在入手可能なM1956/61装備の復刻版と関連アイテムを紹介しよう。

解説/菊月俊之 写真/青木健格 撮影協力/サムズミリタリ屋 <https://www.sams-militariya.com>

M1956装備とベトナム戦争

アメリカがベトナムに本格介入を開始した1962年当時、アメリカ陸軍が使用していた野戦用個人装備はM1956個人用運搬装備 (Individual Load Carrying Equipment) だった。M56装備は戦場における核兵器使用や、ヘリコプターによる部隊輸送を踏まえ、状況に柔軟に対応可能な装備として開発されたものだった。それ以前の装備は兵士が装備一式を携行するようにデザインされており、第2次大戦のデータでは兵士が携行する装備の平均重量は38.2kgに達していた。

調査研究の結果、陸軍補給部は兵士が必要とする装備の総重量は20.4kgが妥当と判断。そこで新型の装備は兵士が携行する装備を最小限にすることに重点をおき、戦場における行動を容易にすることが重視されている。またM1ライフルに代わる新型小銃 (M14) はマガジン給弾式となるため、その点も考慮された。こうして開発されたのがM1956装備で、その後一部改修が加えられてベトナム戦争で大量に使用されることとなった。

M1956装備は従来の個人装備と同じコットン製だったが、コットンには吸水性が高いため濡れると乾きにくく、重量が約4割増しになる欠点があった。そこで検討されたのがナイロン素材の使用で、陸軍ナティック研究所が試作品を製作。その構成アイテム (次ページ図版参照) はM1956装備と同じだった。ナイロンは吸水性が低いため濡れても重くならず (重量増加は0.8%増し)、乾くのも早い利点があり、装備全体の重量も約1.5kgと軽量だった。

ナイロン製品装備の試作品は1966年1月にベトナムへ送られ、高い評価を受ける。こうしてナイロン製装備がM1967として採用され、陸軍特殊部隊や師団偵察中隊に支給が開始された。しかしナイロン製装備は生産が難しいため支給量は充分ではなく、ベトナムの戦場ではコットン製のM56とナイロン製のM67の混用が一般的だった。こうして採用されたM1967装備だが、73年に新型の他用途軽量個人携行装備、通称ALICE (All Purpose Lightweight Individual Carrying Equipmentの頭文字) 装備が採用されたことで正式解除となっている。

戦闘装備と完全野戦装備

アメリカ陸軍の個人装備は第2次大戦中に戦闘装備 (Combat Load) と完全野戦装備 (Full Field Load) に区分されるようになり、1944年には兵士が背負うバックが戦場で必要な装備を入れるコンバット・バックと、戦場における生活用品を収納するカーゴ・バックに分けられた。だが、このコンセプトはM1956装備の開発には取り入れられず、バックは小型されてしまう。しかしM56装備のM56/61フィールド・バックは容量が不十分で、ベトナムの戦場ではフレーム式のライトウェイト・リュックサック等の大型バックが多用されている。兵士の装備を戦闘装備と完全野戦装備に区分するコンセプトが復活するのは73年採用のALICE装備からとなった。

復刻版M1956/61装備

近年オリジナルが減少したアメリカ陸軍のM1956装備だが、リエナクター向けに復刻版が製作販売されている。今回紹介するのはサムズミリタリ屋扱いの装備セットで、構成アイテムは①ピストル・ベルト (個人装備ベルト)、②サスペンダー、③フィールド・バック、④アミュニション・ケース2個、⑤キャンティーン2個、⑥ファーストエイド・ケースで、ベトナム戦争仕様のスタイルとなっている。(撮影協力:サムズミリタリ屋/VN戦米軍M56/61装備セット/価格2万6400円)



M1944フィールド・バック

M1944カーゴ・バック



ファーストエイド・ケース

サスペンダー

アミュニション・ケース

アミュニション・ケース

キャンティーン

ピストル・ベルト

フィールド・バック

キャンティーン



ベトナム戦争中に使用されたM1956/61装備は現在品薄で、アイテム一式を揃えるには困難がともなう。その意味でセットで一式購入が可能な復刻版はリエナクターやコレクションを始めようというファンには格好的存在。型式がM56/61なのはセットを構成するフィールド・バックが後期タイプのM1961を再現しているため。

スライド・キーパー SLIDE KEEPER

M1956装備の特徴の一つが装備同士を連結する金具で、M1910装備から使用されてきたダブルフックをスライド・キーパーに変更している。従来のダブルフックでは連結位置がアイレット (はと目) の位置によって制限されるが、スライド・キーパーではそれより連結位置の自由度が若干増している。また装備を吊るダブルフックには激しい動きで装備が弾んだが、スライド・キーパーでは装備がベルトに密着するため、これを防止する効果もあった。スライド・キーパーは俗に "ALICEクリップ" と呼ばれるが、これはM56装備後継のALICE装備にも使用されたことによる呼称。



実物 (右) と復刻版のスライド・キーパー。復刻版のスライド・キーパーは動きやすいように緩くなっているが、クリップの弾力によって (湾曲しているのに注目) 確実にロックされる。ちなみに実物のスライド・キーパーは、サムズミリタリ屋が米軍ALICEクリップセット (2本) として価格440円で販売中。

スライド・キーパーの装着

スライド・キーパーはクリップとスライド・バーから構成され、装着時にはバーを上へ引き上げた状態でベルトをクリップに挟む。そしてバーを押し下げて固定するが、その際はバーの先端が必ずクリップの穴に入るようにする。



正

誤

M1956装備のエントレンチング・ツールはコンビネーション・ツールとも呼ばれ、前モデルのM1943にツルハシを追加したのが特徴。

ダブルフック

1910年型歩兵装備から導入された装備用連結金具で、ベルト等に取り付けられたアイレット (はと目) に引っ掛けて使用する。M56装備にはそれ以前の装備を組み合わせて使用することも多く、ピストル・ベルトとフィールド・バックにはダブルフックに対応したアイレットが取り付けられている。



イントレンチング・ツール・キャリアー INTRENCHING TOOL CARRIER

今回紹介する復刻版に含まれていないのがイントレンチング・ツール・キャリアー。ベトナム戦争中のものはM1943イントレンチング・ツール (スコップ) にツルハシを追加したコンビネーション・イントレンチング・ツールだったが、戦争後期には新型の2段折り畳み式が導入され、ケース (左ラスト参照) もそれに対応したものに変更されている。



M1956装備の構成アイテム

1977年発行のマニュアルFM21-15に掲載されたM1956装備の構成アイテム。ベトナム戦争中の67年にはナイロン製の装備が導入されたが、ここに描かれているのはコットン製のもの。サスペンダー下のイントレンチング・ツール・キャリアーのみ新型となっている。



M1956装備のイントレンチング・ツール・キャリアーは基本的にM43と同型だが、連結金具がスライド・キーパーになり、フラップももLTD (リフト・ザ・ドット) ファスナーからスナップファスナーに変更。そしてパヨネット装着用にアイレット付きのタブと固定用ストラップが追加されている。

TOKYO
MARUI

BBエアリボルバーPRO

SAA.45
SINGLE ACTION ARMY
4 3/4 inch Civilian

いよいよ発売! エアリボSAA
“早撃ちガンマン本命モデル”

Photo & Text by Takeo Ishii 東京マルイ ☎03-3605-1113 www.tokyo-marui.co.jp



10歳以上用(=0.135J以下)
パワーながら飛距離・操作性と
ともに実用性充分なエアーク
ッキングリボルバー! 何よりコ
ルトSAA特有の操作法のリア
ルさ&楽しさを追求した第1弾
「コルトSAAアーティラリー
(5 1/2インチ銃身)」のスマ
ッシュヒットも記憶に新しい東京
マルイから、待望の第2弾モデ
ル「シビリアン(4 3/4インチ
銃身)」がいよいよ発売!



70mm高精度インナーバレルはアル
ミ製。銃口から覗くとかなり奥ま
っている。カートリッジ先端とシ
リンダー前面はほぼ面(ツラ)位
置で、インナーバレル後方パッキ
ンと密着しエアを漏らさない。

カッコ良いケースに入って6
発付いてくるカートリッジは
実物の「.45ロングコルト弾」
とほぼ同サイズ。6発で約45g
の重量がシリンダーに程よい
トルク感を与える。

SAA.45 4 3/4インチ シビリアン
●全長:266mm ●全高:136mm ●全幅:42.2mm ●インナーバ
レル長:70mm ●重量:434g(※カートリッジ込) ●装弾数:6発
●動力源:コッキング式エア、10歳以上用 ●可変HOP-UP搭載
●平均初速:32m/秒=約0.102ジュール(※ファインストBB弾0.2g
使用、気温28℃、湿度52%) ●近日発売・価格15,180円



ハンマーダウン状態。実銃でも弾が
入っている状態だとこの程度は浮い
て見える。 ハーフコックでシリンダーがフリーとなり、ロー
ディング・ゲートからカートリッジ装填が可能に。 フルコック状態。グリップ内エアシリンダーのス
プリングを圧縮している割には軽く起こせる。

ポスターやパッケージのデザインが素晴らしい東京
マルイ製品。銃に付いてくるカートリッジはヨコ型、
別売はタテ型と、パッケージにも楽しい変化が!

●SAA.45用スペアカートリッジ(6発) 3,278円

未だ現役! 伝説の“ピースメイカー”

「西部劇の拳銃」として世界的に、あ
らゆる世代に大人気のコルトSAA
(=シングルアクション・アーミー。
通称は「ピースメイカー(=平和を
もたらす者)」。
シリンダー上下を囲むようにデザ
インされた一体型フレームとシン
グルアクションのシンプルなメカニ
ズムが与えた強度・信頼性は1872年
に行われたアメリカ陸軍の採用試験
で高い評価を受け、翌1973年7月23
日にはコルト社に8,000丁が発注され、
制式名「M1873」として米陸軍が採用。
1890年までに37,000挺以上が納入さ

れ、世界中の植民地紛争等で活躍した。
頑強なフレームとシリンダーによ
って標準弾薬として設定された「.45
口径ロングコルト弾」の威力は当時
の米軍将兵から絶大な信頼を獲得。
現在にも伝わる「ストップング・パ
ワー信奉=.45口径神話」は、後に制
式採用拳銃となるオートマチック
「M1911」にまで受け継がれる事に
なる。
1896年には従来の黒色火薬より強
力な「無煙火薬」に対応するためフ
レームが強化されたり、シリンダー
ピン固定ネジがフレームを貫通する

デザインに変更される等、いくつか
の改修を経て、後の愛好家からは「
〇ジェネレーション(=世代)」とい
った分類がなされている。
第二次世界大戦の影響で1940年~
1947年の7年間のみ製造中止にな
ったが、現在もコルト社はSAAの製造
販売を継続。さらに20世紀後半には
特許が失効した事から多くの銃器メ
ーカークがSAAのコピーモデル製造に
参入し、現在も多くの愛好家が世界
中でこの銃を求め、楽しんでいる。
有名な「テキサス・レンジャー」
では、現在もなお一部の隊員がコ
ルトSAAを使っているそう。つまり法
執行機関でも現役バリバリ!





月刊
THE GREEN BERET
GREEN BERET
vol:53

SPECIAL FORCES CIF COMPANIES

Part 1

特殊部隊CIF中隊特集パート1

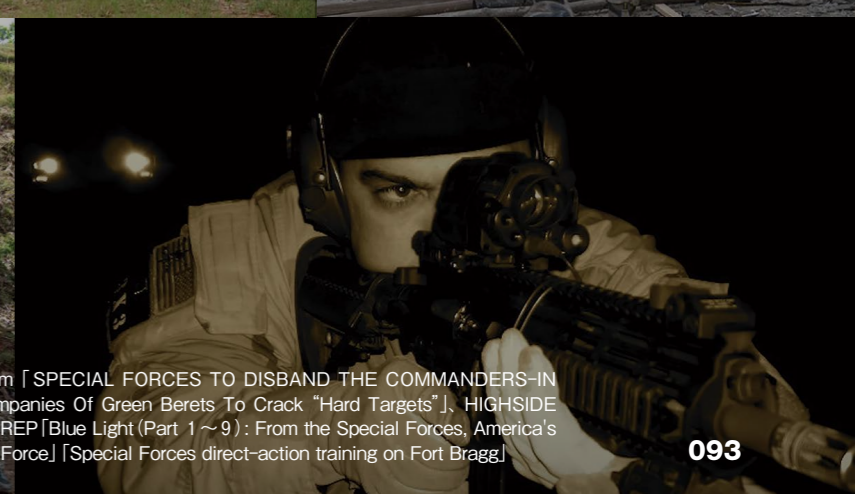
文/DJちゅう 写真/U.S.ARMY

グリーンベレーの中で、対テロ (CT)、ダイレクトアクション (DA) 任務に重点を置いていることで知られる”CIF中隊”。本連載内でも何度かCIFに関する装備スタイリングを紹介しましたが、肝心の「CIFとは？」に関しては、実はきちんと触れたこと

がなかったんですよね。過去に掲載したMOS特集、チームスペシャリティ特集、サポートチーム特集と、グリーンベレーの組織に関する解説の流れで、CIFは避けて通れない項目ではあったのですが、ここ数年間のCIFは存在自体が非常にあやふやな状態

で、解説するにも不確定要素が多く、僕としては解説するにあたって慎重になる必要がありました。というのも、CIFは途中CRFに名称変更したり、なんかやあって解散してしまったり、無くなったのかと思えば形態を変え、新たなブランドとして再始動する

も矢継ぎ早に名称変更したり、あまりに生モノ過ぎたからなのです。しばらく情報収集に努めていましたが、今年に入りようやくCIFに関するアレコレが一区切りついた気がしましたので、今号のパート1を皮切りに待望のCIF特集スタートです！



参考文献
AMERICAN SPECIAL OPS [Special Forces CIF Companies], jackmurphywrites.com [SPECIAL FORCES TO DISBAND THE COMMANDERS-IN-EXTREMIS-FORCE (CIF)], THE WARZONE [The Army Is Training Specialized Companies Of Green Berets To Crack "Hard Targets"], HIGHSIDE [Revenge on the CIF - How "The Haters" Cut Special Forces' Last Link To JSOC], SOFREP [Blue Light (Part 1 ~ 9) : From the Special Forces, America's first counterterrorism unit] [This long-forgotten unit was the direct predecessor to Delta Force] [Special Forces direct-action training on Fort Bragg]



集結! 北部方面隊 即応機動連隊

陸自の改編に伴い、全国に続々と新編されている即応機動連隊。北海道を守る北部方面隊にも第3、第6、第10即応機動連隊が誕生。これまでソ連、その後のロシアに睨みを効かせる北方重視の戦術を改め、今後は日本全国必要とされる場所へと即応できる体制を作り上げた。この流れを写真とともに詳解していく!

北部方面隊では、師団および旅団の改編がひと区切りついた——。これは冷戦時代から続く「北海道防衛警備のためには機甲科を中心として各職種装甲化した装備が必要不可欠」という考えからの脱却でもある。中国の脅威が増し、防衛省は南西諸島部の防衛を強化していくことを

決めた。そこで、これまで防衛空白地とすらいわれてきた沖縄以南の島嶼部、さらに鹿児島県から沖縄県の間に広がる奄美群島に駐屯地を造ることになった。こうして、現時点で与那国駐屯地、宮古島駐屯地（以上、沖縄県）、奄美駐屯地、瀬戸内分屯地、奄美駐屯地（以上、鹿児島県）が作

られ、2023年3月に石垣島駐屯地が新たに開庁した。

しかし、各島に常駐できる人員や装備には限界がある。そこで、九州や本州、北海道の師団および旅団から部隊を派遣し、逐次増強していく流れを作った。

この即応展開戦術の象徴となるの

が即応機動連隊である。名前の通り、すぐに部隊を派遣できるように、普通科、機甲科、特科、施設科といった戦闘職種をひとつにパッケージ化した、これまでの陸自にはなかった部隊だ。これにより従来通りの戦術である、師団や旅団の各部隊を集めて戦闘団を作るよりも早く部隊を必

要とされる場所へと展開できるようになった。

北部方面隊は、ソ連という強大な敵に立ち向かうために、戦車を集中配備し、各部隊を装甲車化するなど、本州や九州の部隊とはまったく異なる整備をされてきた。

冷戦が終結し、ソ連がロシアとなり、脅威の度合いこそ減じはしたが、依然日本の安全保障を脅かす存在であることに変わりはない。そこで、これまで通り北海道をしっかりと守りながらも、南西諸島部等へと部隊を派遣していくことになった。

北部方面隊には、日本唯一の機甲師団である第7師団（司令部：東千歳駐屯地）と、道北を守る第2師団（司令部：旭川駐屯地）、道東を守る第5旅団（司令部：帯広駐屯地）、道央・道南を守る第11旅団（司令部：真駒内駐屯地）がある。

この中の第2師団、第5旅団、第11旅団を機動化し、即応機動連隊を

配置することにした。

最初に改編を終えたのは第11旅団だ。2019年3月19日、機動旅団化改編された。これに伴い、第10普通科連隊（滝川駐屯地）を母体とした第10即応機動連隊が新編された。

ここで「北海道限定機動化モデル」たる部隊編成が出来上がる。ほかの師団および旅団が機動化改編され即応機動連隊が新編されると、同部隊または方面直轄部隊へと吸収される形で戦車部隊や特科部隊も廃止となっていく。しかし、第11旅団については、戦車部隊も特科部隊も残した。これは、ロシアが戦闘大隊の中核に戦車を配置している以上、戦車は絶対に必要な存在であるからだ。そのため、第11旅団には、第11戦車隊、第11特科隊がしっかりと編成されている。

2022年3月17日、第2師団が機動化改編された。これに伴い、第3普通科連隊（名寄駐屯地）を母体とした第3即応機動連隊が新編された。

96式装輪装甲車から展開し、20式小銃を構える第3即応機動連隊の普通科中隊の隊員。即応力に特化した即応機動連隊は、日本の防衛を大きく変える存在となる。